帝京科学大学紀要 Vol.8（2012）pp.189-191

自主参加型実習「うえのはら自然学校」・「TEIKA 自然学校」の実施概要および参加学生の意識調査に関する報告

[1]篠原正典、[1]下岡ゆき子、[1]浅賀喜与志、[1]渡邉浩一郎、[1]橋本慎治

[1]帝京科学大学生命環境学部自然環境学科

Report on voluntarily joining practical trainings and the results of questionnaires and interviews on the participants.

Masanori SHINOHARA[1]　Yukiko SHIMOOKA[1]　Kiyoshi ASAGA[1]
Koichiro WATANABE[1]　Shinji HASHIMOTO[1]

Key word：野外実習、退学者

1．はじめに

昨今、多くの大学において、教養課程が撤廃され、入学まもない1、2年生においても、学部教育につながる専門性の高い講義・実習が履修可能となっている。本学もその例にもれず、学部が提供する専門科目が2年生までに多数履修できる環境となっており、本学科（自然環境学科・2011年度学生便覧）においても、専門科目140単位中、実に110単位が2年生までに修得可能なカリキュラムが組まれている。

このような状況にはありながらも、本学科においては、入学してから具体的な学習目標や将来の活躍分野への具体的な展望を描きにくいという少なからぬ声を、学生たちとの日常的な対話や退学時の面談などから聞き及んでおり、それらが学習意欲の低下や退学者増の原因になっていると捉え、問題視してきた。

これを踏まえ、本学科では、学生の学習意欲の維持・向上、および退学率の低下をはかることを主たる目的として、現在の学科カリキュラムには存在しない、導入的で楽しめる自然環境系の実習の創設を検討した。幸い2009年度および2010年度の2カ年にわたり教育推進特別研究費の補助を受け、外部講師による自主参加型の特別実習『うえのはら自然学校』および『TEIKA 自然学校』を実施できたので、その実施概要とそこから得られた知見や課題を報告する。

2．自然学校の内容と学生へのアナウンス

うえのはら自然学校（**表1**）は4回の野外実習と1回の講義演習形式の描画の実習を、TEIKA 自然学校（**表2**）は6回の野外実習と2回の講義演習形式の描画の実習を計画した。いずれも1日で完結する実習であり、事後のレポート提出は課さず、単位の取得とは関係ない実習とした。

上記内容に関しての学生への周知を、掲示物および関連教員の講義前後での口頭説明により、それぞれの実習の1～3ヶ月前より行った。その際、実習参加後に任意でアンケート調査への協力を依頼することがある由も伝えた。事前の人数把握のため、参加受け付けはメールによって行ったが、当日の飛び入りでの受講も可能とした。

3．参加の実態

それぞれの学校は、2010年度の「河川の石と土から何がわかる？」が悪天候のために中止になった以外は、全てが実施された。個別の参加者数はそれぞれ**表1**、**表2**に付した通りであり、他学科・他学年を含むのべ147名＋αの参加者を得た。講義形式で実施した「動物を描く」実習（**図1**）と、野外で実施した「野鳥に学ぶ上野原の自然」実習（**図2**）の様子をそれぞれ写真で紹介する。ほぼ全ての実習で、実習・講義が終わった後まで、講師を交えた歓談や質疑が続いた。

4．アンケート調査の結果と考察

自然学校の参加者には、以下の学校生活の充実や学習意欲の向上などに関連する質問をメールにて送付し、任意で回答してもらった。全て「今回の自然学校は○○」という問いで、はい、いいえ、どちらでもない、で解答を依頼した。

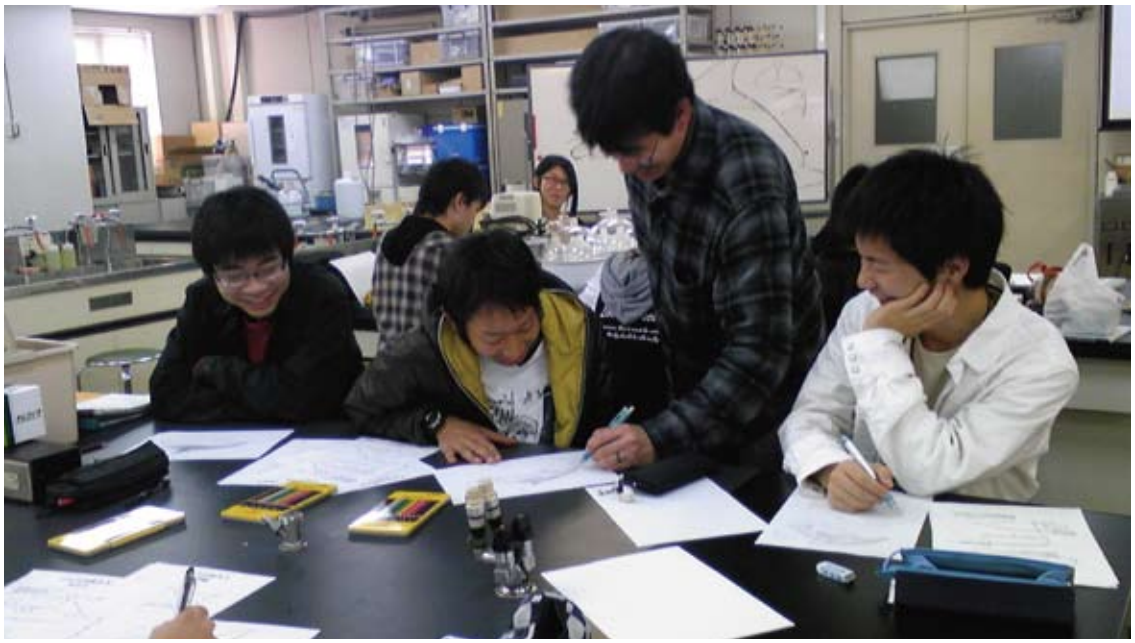

図１．自分たちが描いた絵に講師から直接指導を受ける。

１）楽しめた
２）大学の単位取得に役立った
３）学校生活の充実につながった
４）学校で学べない内容だった

両年ともに、参加学生のおおよそ2/3から回答を得た。質問２）に関しては、（いいえ）が半数以上を占めたが、質問１）、３）、４）に関しては、解答者全員が、（はい）の回答であった。このことから、学生の学校生活の充実や学習意欲の向上につながったことが伺えた。また、参加学生の中でこれまでに退学をした学生がいないことが確認されている(2012年１月現在)。大学全体の退学者率6.40％（上野原キャンパス全学部学生)、2.13％（千住キャンパス１，２年生）を考慮すると、重複参加者も多く統計的な検討はできなかったが、退学率の低下という目的に照らしても､良い結果が得られたといえる。

以下に、アンケートの自由記述より、参加学生の肉声のいくつかを列挙して紹介する。「野外で行うことも魅力だった。」､「石、絵は普段取り組む機会がなくとてもよい経験になりました。」､「自分が知らないことばかりであったので､「へぇ～」と思えることが多く勉強になった。」､「色々な分野で学べ、講師の方たちも素晴らしい人ばかりでした。」､「絵を描くにあたって､静止画と動画を見本にしたので、観察するポイントや描くためのコツを教えていただき、観察眼の大切さを知りました。」､「絵は講義後も、その後の活動の良い参考となっています。」､「鳥でお世話になった大西先生には、その後早川町野鳥公園で行われるカモシカのイベントの予備調査に誘われるなど学外交流のきっかけになりました。」､「日程が合った日だけでも気軽に参加出来るところも良かった。」

5．今後の課題

自然学校の参加者からは、退学をせず、楽しめ、学生生活の充実につながったという情報・意見を得たが、今回のような自主参加型の実習で、さらに自主的な回答を得る形では、実際に（統計的に）学生の学習意欲の向上や退学防止につながったかの検討は困難である。自然学校の開設以前から活動的な学生たちが、一層その好奇心・経験・行動の幅を広げるのには役立ったと言えるかもしれない。しかし、学習意欲を失いつつある学生や潜在的な退学者に参加を促せていたとも考えにくく、参加してもアンケートに回答しなかった学生の意見はどのようなものであったかの把握もできていない。これらを改善するためには、学科所属の１および２年生全員を参加させる、あるいは無作為抽出で適当数の学生に実習に参加してもらい、その後の成績の変化や退学率の変化を大学や学科全体の時系列的な変化と比較していくなどの対策が考えられる。

また、年間５回、あるいは８回などの多数回にわたった本事業は、主に講義の少ない土曜日に実施したとはいえ、教職課程履修者などの資格や単位取得に熱心に取り組んでいる学生の参加が難しかったとの意見も聞こえた。同時に、休日に実働した教員の

表１．うえのはら自然学校 (2009 年度) の概要と参加者数。参加者数の + は飛び入りの参加者がいたことを示す。

開催月日	タイトル	講師	開催地・形式	参加者数(人)
10/17	「岩石と土壌」・河川敷の石などを用いた石、岩、土の調査方法の習得	高橋春男 (元東京大学地震研究所)	桂川河川敷 野外実習	12
10/24	「きのこからみる生態系」・きのこの観察・同定を通し、菌類から森林生態系を学ぶ	永富直子(生態計画研究所)	八重山 野外実習	20+
11/21	「野鳥に学ぶ上野原の自然」・野鳥の分類・同定・生態および野鳥を含めた自然生態系を学ぶ	大西信正 (南アルプス邑野鳥公園) ほか	大野貯水池 野外実習	22+
11/28	「動物を描く」・イラストの意義および動物イラストの描き方を学ぶ	河合義晴 (イラストレーター)	大学実験室 講義	23+
12/05	「樹木を観る、自然の豊かさをみる」・高尾山の自然を楽しみ森林生態を学ぶ	高尾山ビジターセンター・自然ガイド	高尾山 野外実習	18

表２．TEIKA 自然学校 (2010 年度) の概要と参加者。参加者数の + は飛び入りの参加者がいたことを示す。

開催月日	「タイトル」・内容	講師	開催地・形式	参加者
10/13	「足立区のビオトープで生物を観察しよう」・ビオトープの基礎知識・維持管理、湖沼の調査方法の習得	谷口吾朗 (桑袋ビオトープ公園)	桑袋 野外実習	3
10/23	「きのこを見つけよう !」・きのこの観察・同定を通し、菌類から森林生態系を学ぶ	永富直子(生態計画研究所)	桂川河川敷 野外実習	6+
10/30	「河川の石と土から何がわかる？」・河川敷の石などを用いた石、岩、土の調査方法の習得	高橋春男 (元東京大学地震研究所)	八重山 野外実習	荒天のため 中止
11/6	「動物を描く」・イラストの意義および動物イラストの描き方を学ぶ	河合義晴 (イラストレーター)	大学実験室 講義	7+
11/13	「海鳥を観察しよう」・野鳥の観察法、分類・同定・生態の学習	大原庄史 (葛西臨海公園野鳥公園)	葛西臨海公園 野外実習	2
11/20	「動物を描く」・イラストの意義および動物イラストの描き方を学ぶ	河合義晴 (イラストレーター)	大学実験室 講義	12+
11/27	「野鳥に学ぶ上野原の自然」・野鳥の分類・同定・生態および野鳥を含めた自然生態系を学ぶ	大西信正 (南アルプス邑野鳥公園) ほか	大野貯水池 野外実習	11+
12/4	「樹木を観る、自然の豊かさをみる」・高尾山の自然を楽しみ森林生態を学ぶ	高尾山ビジターセンター・自然ガイド	高尾山 野外実習	11+

手当はなく、通常期待されている業務や予定されていた休日を割いて本事業を実施せざるを得なかった点も今後の課題といえる。

2011 年度は合宿形式にウェイトをおいた自然学校を試み、現在、その成果や反省点を検討中である。今後も、学生たちの実状や希望に配慮しながら、一層、大学教育の促進につながる事業を企画・提供していきたい。

6. 謝辞

本自然学校を開催するにあたり、ご多忙な中ご指導をいただいた講師の方々、準備や講師補佐にあたってくれた学生諸氏に深謝する。本自然学校は平成 21 年度、平成 22 年度の教育推進特別研究費の助成を得て実施した。

図２．大野貯水池で指導を受けながら野鳥観察に臨む。